



合併して三つの市になった島原半島

#### (4) 島原市・雲仙市・南島原市

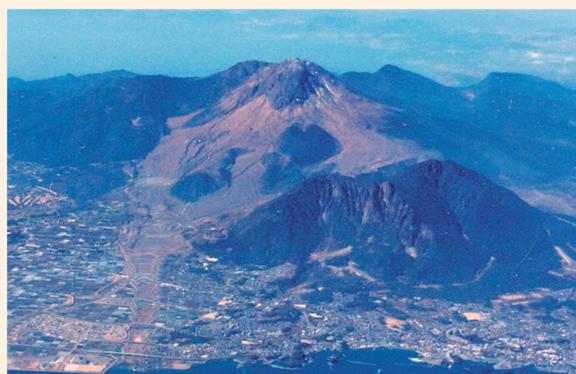
##### ア 雲仙のふもとに広がる島原半島

島原半島の中央部に、  
普賢岳<sup>ふげんだけ</sup>を中心とする雲仙<sup>うんぜん</sup>  
の山々がそびえている。  
かつてこの山々のたび重なる噴火<sup>ふんか</sup>によって、火山噴出物<sup>ふんしゅつぶつ</sup>が海岸線に向かっ



噴火前(平成2年8月)

(提供:島原市)



噴火後(平成15年2月)

(提供:島原市)

てたい積し、ゆるやかなすそ野を形づくっている。

1990(平成2)年11月17日、およそ200年ぶりに雲仙普賢岳<sup>ふん</sup>が噴煙<sup>えん</sup>を上げ、その後当時の島原市<sup>ふかえ</sup>や深江町をはじめ島原半島一帯に大きな被害<sup>ひがい</sup>をもたらした(死者44名(行方不明者3名を含む)、負傷者11名、被害総額2,299億4,197万円)。1996(平成8)年6月に、噴火活動<sup>しゅうそく</sup>の終息宣言が出

され、1997(平成9)年から5か年計画で、行政と民間が一帯となった「がまだす計画」(島原地域再生行動計画<sup>さいせい</sup>)が復興に向けて進められた。

2005(平成17)年10月には、国見町、瑞穂町、吾妻町、愛野町、千々石町、小浜町、南串山町が合併して雲仙市が、2006(平成18)年1月には、島原市と有明町が合併して新しい島原市が、同年3月には加津佐町、口之津町、南有馬町、北有馬町、西有家町、有家町、布津町、深江町が合併して南島原市が誕生した。

みんなで考えてみよう!

島原市・雲仙市・南島原市にはどのような特色があるのだろうか?

MEMO

イ 豊かな観光資源

1637(寛永14)年に、  
島原・天草一揆(島原の  
乱)が起きた。原城(南  
島原市南有馬町)に立て  
こもって滅ぼされた天草  
(益田)四郎時貞を総大  
将とする一揆軍3万7千人の悲劇を物語る資料は、現地のほか、島原  
城にも展示されている。



島原城 (提供:長崎県観光連盟)

島原市は、「有明海にひらく湧水あふれる火山と歴史の田園都市」  
をキャッチフレーズに観光の振興に力を入れている。島原城や武家  
屋敷跡は市のシンボルであり、おとずれる人も多い。

市内の60か所余りには、わき水があり、1日の水量は、長崎市の1  
日の上水道給水量よりも多い。水質がよく、環境省選定の「名水百  
選」にも選ばれた。道路わきの水路に鯉が泳ぐまちとしても有名で  
ある。

島原半島には、海と山の温泉をもつ雲仙市、美しい砂浜やイルカ  
ウォッチングが楽しめる南島原市などの観光地もある。

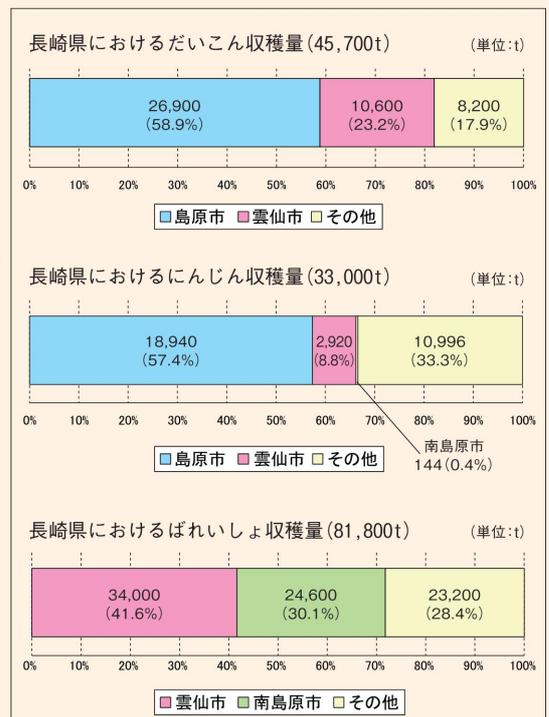
ウ 県内最大の農業地帯

島原半島は、温暖な気候、雲仙がもたらす豊富な水、よく肥えた  
土地など自然にめぐまれ、県内最大の農業地帯となっており、じゃ  
がいも、レタス、だいこん、はくさい、いちご、トマトなどが栽培  
されている。

長崎県のじゃがいもは、  
全国3位の産出額である  
が、その約7割は島原半島  
産であることから、島原半  
島は「じゃがいも王国」と  
呼ばれている。

島原半島は、畜産も大変  
盛んである。肉用牛、乳用  
牛、豚、にわとりなどが多  
く飼育されており、島原半  
島の畜産産出額は、県全体  
の約45%をしめている。

みんなで考えてみよう!  
島原半島ではどのよう  
な農業が行われている  
だろう?



令和4年度作物統計調査より



雲仙グリーンロード(総延長64km)

輸送したりすることに役立っている。このような広域農道が半島をほぼ一周することにより、農産物の流通がさらに図られ、県内をはじめ、北九州や関西方面への食料供給地となっている。

また、南島原市は、島原手延べそうめんの特産地として全国的に知られており、品質向上のための技能検定試験ぎのうけんていをおこない、後継者育成に力をいれている。

## (5) 佐世保市とその周辺

### ア 佐世保市の自然

佐世保市は、人口230,226人(令和6年10月)の県北部の中心都市である。

佐世保川や相浦川などの川沿いや海岸部以外は、平地が少ないため、山の斜面にまで住宅が広がっている。また、海岸線は複雑に入り組み、九十九島と呼ばれる小さな島々があって、五島列島や平戸とともに1955(昭和30)年に西海国立公園さいかいに指定された。

### イ 佐世保市の発展

佐世保は、明治時代の初めまで小さな漁村であったが、1886(明治19)年に日本海軍の軍港となり、造船所も置かれ急速に発展した。1902(明治35)年には、村から市となり、周辺の町や村を合併しながら市域しいきが広がっていった。



佐世保市とその周辺

## エ 発展する産業

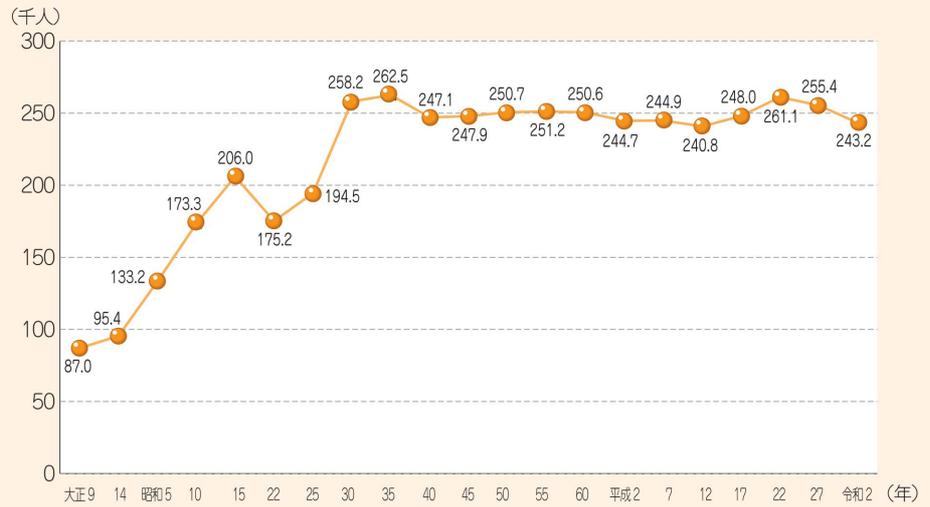
2000(平成12)年2月、待望の広域農道「雲仙グリーンロード」が着工から28年かけて全線開通した。この道路は、農作業をしやすくしたり、農産物を

## MEMO

みんなで考えてみよう!

佐世保市とその周辺にはどのような特色があるのだろうか。

MEMO



佐世保市の人口推移(国勢調査)

みんなで考えてみよう!  
佐世保市ではどのような産業がさかんに行われているだろう?

近年でも、2005(平成17)年4月に吉井町及び世知原町と、2006(平成18)年3月に小佐々町及び宇久町と、さらに2010(平成22)年3月に江迎町及び鹿町町と合併し、新しい佐世保市が誕生した。

また、造船業が重要な産業として発達し、アメリカ海軍と海上自衛隊の施設や住宅なども多い。

ウ 県北経済の中心佐世保市

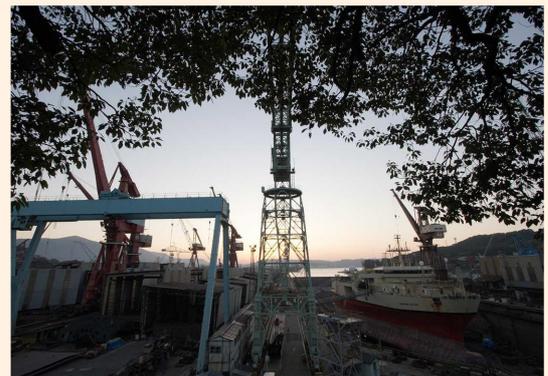
市の中心部には、連続したものとしては日本一の長さを誇るアーケード街があり、多くの商店やデパートが約1kmにわたって立ち並び、買い物客でにぎわっている。この商店街は、四ヶ町やサンプラザからなり、市内外の広い地域から買い物客を集めている。



さるくシティ403アーケード (©SASEBO)

このように佐世保市は商業が盛んで、働く人の約77.2%は、第3次産業(商業,サービス業など)に従事している。(R2国勢調査)

造船業は、戦後の佐世保市を発展させる原動力となった。佐世保重工業(SSK)の広い工場には、クレーンが立ち並び、



佐世保重工業 (©SASEBO)

## MEMO

大きなドックがある。また、周辺にはSSKに関連する工場や会社も多い。

観光産業では、西海橋<sup>さいかいばし</sup>や九十九島などの代表的な観光地に、1992(平成4)年3月、市の南部に建設された「ハウステンボス」が加わった。

近年<sup>こうがい</sup>、郊外には新たに住宅地が次々につくられており、市内へ通勤、通学する人も多い。また、西九州自動車道の整備も進み、県外とのつながりも強まってきている。

## エ 東彼杵郡のようす

東彼杵郡は、佐世保市と大村市の間に位置し、東彼杵町<sup>ひがしぞのき</sup>、川棚町<sup>かわたな</sup>、波佐見町<sup>はさみ</sup>の3町からなり、人口は33,710人(令和6年10月)である。

東彼杵町は、江戸時代から鯨の水揚げ地として活気があったが、現在、町を特色づけるのは茶の生産である。茶畑は日当たりの良い丘の斜面につくられ、生産量は県全体の約65%をしめている。

平成29年度から4年連続で全国茶品評会審査会において、「そのぎ茶」が日本一に輝いた。

川棚町では、太平洋戦争中に置かれていた軍の工場跡地<sup>あとち</sup>を中心に、耐火レンガ<sup>たいか</sup>、縫製<sup>ほうせい</sup>、食肉などの工場が進出して町の主な産業となっている。また、大村湾に面した大崎半島にはレジャー施設<sup>しせつ</sup>もあり観光にも力が入れている。



東彼杵町の茶畑

(提供:長崎県観光連盟)

波佐見町<sup>はさみ</sup>は、約400年の歴史をもつ焼物の町<sup>やきもの</sup>として全国にその名を知られ、町内の焼物工場において、町民の多くが陶磁器産業<sup>とうじき</sup>に従事している。現在もレンガ造りの煙突群が、陶芸の里としてのたたずまいを残し、個性的な産業景観を生み出している。また、2008(平成20)年に長崎キャノン株式会社が設立され、2010(平成22)年3月からデジタルカメラを製造している。



レンガ造りの煙突が立ち並ぶ波佐見町(提供:長崎県観光連盟)